

正宗白鳥

二葉亭に就いて

一葉亭について

一

『あひびき』は、ツルゲネーフの『獵人手記』のうち
の、最も短いものの一つの翻訳であるが、当時のいろい
ろな作家の創作よりも、不朽性をもって明治文学史上に
光を放っていることは、衆人の認めているところである。
二葉亭や鷗外の翻訳のあるものは、単なる外国文学の翻
訳というよりも、明治文学中の重要な古典だといってい

い。『あひびき』は、明治二十一年に『国民之友』誌上に掲げられたのだが、その頃世に現れたどの創作だって、この翻訳に比べると、稚拙であり陳腐である。

文章だけについても、言文一致体のそれとして、最初から殆んど完成している。『浮雲』よりもいい。『あひびき』『めぐりあひ』の二篇は翻訳でありながら、自然と人生に対する新しい情緒と、それを生々いきさきと表現する新しい文体とを、新日本の文壇に示したのであるが、当時は幾人の読者がその味を翫賞がんしょうしたことであろう。少数の敏感な青年文学者の心を刺戟しただけであったと

思われるが、その以前のさまざまな、粗雑なる政治小説の翻訳とは違って、微妙な芸術的感触を、新代の青年の心に伝えたのであった。この二篇が奇蹟の如く新文壇に投げ出されたあと、彼れの翻訳は暫らく杜絶していたが、明治三十年前後から、新たに、しかも頻繁に、露国の名小説の翻訳が現れるようになった。今度は、新日本の文学もよほど進歩していたので、それらのロシヤ物も、前よりは多数の読者を得るようになった。しかも深く翫賞されるようになった。そして、日本の創作よりもかえって青年の心に響くところが多かった。

森鷗外は雑誌『趣味』の、二葉亭追悼号において、「翻訳はいくら巧くつても、それだけでは、文学者の価値を上下するに足らぬ。二葉亭も創作で評価すべきものだ」といった意味の感想を述べていた。鷗外自身、すらすらと労せずして翻訳の筆を執っていたため、翻訳を軽視していたのかも知れないが、二葉亭の外国文学移植はそんな手易いものではなかった。

私は、日本はいつまでも翻訳国ではないかと思う。明治初年の自由民権説の輸入以来、今日でも、外来思想の直訳がそのままに受け入れられて、青年の血を湧かせて

いる。文学でも、外国の文学が、今なお盛んに翻訳されている。しかも、自国の文学を今なお圧倒している。新潮社の円本翻訳文学集が、数十万の会員を得て、多くの翻訳家が、作家にも勝った巨額な印税を獲得するといふ奇異な現象をさえ呈するに至った。

独創の才は文壇に乏しい。二葉亭だって、創作の方は、翻訳に比べると、見栄えがしない。

翻訳のうちでは、ツルゲネーフ物が最も多数を占めているが、出来栄も最も傑すぐれていると思われる。当時の日本の文学青年は、この多感多情で、近代思想をも胸に

抱いていた詩人的小説家ツルゲネーフの作品に最も共鳴したのであった。紅葉露伴一葉などの創作に対するよりも、むしろ、二葉亭によって移植されたツルゲネーフの『片恋』や『うき草』などにおいて、一層よく真実の自己を見出したかも知れなかった。若い心に潜んでいるものを惹き出されたのであった。ルーヂンやアーシヤは、異国の無縁な男女ではなくなって、露伴紅葉などの作中の人物よりも、読者の身に親しく思われたのであった。

私は、森田思軒が「懐旧」と題して翻訳したユーゴの『バクジヤルガル』でも、あるいは、『即興詩人』な

ど鷗外の翻訳小説でも、明治二十年代の日本文学のうちでは、最も印象の深かったものとして心に残っているのを覚える。そしてこれらの翻訳家は意味を伝えるだけではなくって、それぞれに文体や表現やの味いを閑却しなかった。そのうちでも、二葉亭はことに苦心した。鷗外思軒などとはちがって、はじめから言文一致体で、日常語を自由に使ったから、誰れのものよりも新味に富んでいた。ゴルキーの『猶^{ユダヤ}太人の浮世』や『ふさぎの虫』などは、あまりに二葉亭化されて、筆に調子がつき過ぎて、洒落っ気があり過ぎて、ゴルキーの原作が、こんなに垢抜け

がしているのであるろうかと疑われるほどであるが、ゴルキー物を材料とした一つの創作として見ると面白い。日本の翻訳のうちで、翻訳的創作と銘を打っていいものは、この二篇に留めを差すのである。二葉亭の面目が躍如としている。多少の戯作者口調を含んで、しかも生きのいい、取り立ての魚がぴちぴち跳ねているような趣のあるのは、この二篇で、二葉亭の才分は、ここにおいて、最もよく発揮されている。私は、この頃でも、おりおり取り出して愛誦している。二葉亭の写したツルゲネーフのある物は、今日の私には、実はあまり面白く感ぜられない

くなっているが、『ふさぎの虫』などは、内容も文章も面白い。

ところが、二葉亭の創作は、彼れの翻訳的創作である『猶太人の浮世』や『ふさぎの虫』などに比べると、著しく劣っている。そこが私に取っては考うべき問題になっている。

二

翻訳では文章が、ぴちぴち跳ねるように生きているの

に、創作では、筆が著しくいじけている。原作の束縛を受けるとき翻訳において、自己の才気が随分に働いて、自由自在に書けるはずの創作が、かえって窮屈そうに見えるのは、いたましく思われる。

『浮雲』が、『書生氣質』かたぎなどと殆んど同じ時代に現れたことは異例であって、たとえばそれがロシヤ文学の刺戟によったとはいえ、この作者の天分に、他の凡庸の徒と違ったところのあった証拠とすべきであろうが、日本のその頃の周囲の状況がこの作者の天分を充分に培養し発展させるのに適しなかったためか、あるいは作者自身

の心掛けが当を得なかったためか、あるいは、天分にそれほどの強み深みがなかったためか、とにかく、はじめの勢いは続かなかつた。創作道において、作者は直ぐに息切れがした。反省力をつよい二葉亭の煩悶苦悩が、私には想像される。

『浮雲』も第一篇と第二篇とが、今日なお読み応えのあるものであるが、その続きはガタ落ちがする。読むに堪えぬほどだらしないものである。創作に断念していた彼れが、処女作後二十年も経ってから、新聞社に対する義理から止むを得ず執筆した『其面影』には、いくら

か読者受けはしたらしかったが、『浮雲』以上の何物でもなかった。彼れに対して、過分の好意を寄せていた内田魯庵氏でさえ、『浮雲』の描写は直線的に極めて鋭く、色彩や情趣に欠けている代りには、露西亞ロシアの作風の新らしい匂いがあった。これに反して『其面影』の描写は、婉曲に生温く、花やかな情趣に富んでいる代りに、新しい生気を欠いていた。幸田露伴はかつて『浮雲』を評して、地質の断面図を見るようだとしたが、『其面影』は、断面図の代りに、横浜出来の輸出向きの美人画を憶出させた」といっている。これは適評である。『浮

雲』よりも古い感じのする小説である。哲也と小夜子さよことが、レストラントで会食するあたりは、作者もなかなか味をやっているが、全体としては、ただの通俗小説である。文章だって翻訳のようには冴えていないのだ。

第三作『平凡』では、二葉亭も、思い切って自分を投げ出したので、『其面影』ほど陳腐平凡ではなかったが、さしたる深みも厚みも、鋭さも、あるいは軽快な味いも見られなかった。犬についていろいろ叙述したところは、写実の妙があるが、こんな挿話だけで生命を保っているような小説である。しまいの方のお糸さんの一件なんか、

型の如き通俗味の漂っているもので、私の空想裡にある二葉亭がどうしてこんなものを書いたかと疑われるほどに低級な感じのするものである。……しかし、この小説には、ところどころ作者自身の文学観や自己批判らしいものが出ているのが面白い。

『平凡』は鷗外の『中々・セクスアリス』と同様に、当時流行の自然主義の刺戟によって思いついたものらしい。『其面影』の型を脱して新しい意匠を凝らす力のなかった彼れは、日本の自然主義者らの書き振りの手易さに目を留めて、おれもその手で行こうと思ったのである

う。「近頃は自然主義とかいって、何でも作者の経験した愚にも附かぬ事を、聊いさやかも技巧を加えず、有ありのままに、だらだらと、牛の涎よだれのように書くのが流行はやるそう
だ。好い事が流行る。私もやはりそれで行く」と、はじめにいつているのは、必ずしも戯談じょうだんではあるまい。自然主義というと、日本では、二葉亭こそ最初にロシヤの本場の自然派文学に接触した文学者であって、それを翫味しそれに心酔し、それをはじめに日本に紹介したので、独歩でも花袋でも、その感化を受けて、新文学に向ったといつてもいいくらいなのだが、しかし、花袋氏などに

よって唱えられた自然主義は、ツルゲネーフやトルストイなどとは違っていた。「聊かも技巧を加えず、だらだらと牛の涎のように書く」ものと、二葉亭には思われていたのである。

しかし、鷗外は、文学に関心するところの少なくなかった人であったため、自己に逆らっていた年少の徒に対して、戦鬪的態度を持していたが、二葉亭は、「文学はどうでもいい」と思っていたためか、あるいは自己の才能の乏しさを感じる謙遜性のためか、「愚にも附かぬことをだらだらと書く」日本流の自然派小説をも相当に認

めていたらしかった。

日本の自然主義に刺戟されて書かれた鷗外の性慾小説はあんな風であって、二葉亭の性慾小説は、この『平凡』のようなもので、二つを比較して、二作家の人となりの相違が察せられる。

そして、鷗外は、楽々と書きこなしたのに反して、二葉亭は、『其面影』でも『平凡』でも、苦辛くしん慘澹さんたん「造物主が天地万物を産み出す時の苦しみ」を経て、作り出したのであった。神経質の彼れは、「どうでもいい」と口ではいいながら、どうでもいいで澄ましていられなくつ

て、一字一句にも全力を注いだのであったが、彼れは、自分で認めていたように、創作の才は乏しかった。

彼れの翻訳を読むと、しきりに名文句に出くわし、訳者の筆に感歎されるのだが、創作には、滅多にそういうところが見つからない。三篇が三篇とも、愚図愚図した煮え切らない男を主題としているのだが、作者の観察の目や描写の筆が、一作ごとに深くも鋭くもなっているのではない。彼れは、實際界においては夢想家であったのだが、芸術家としては、空想力が極めて貧弱であった。文学を一生の事業とする気にならなかったのは、自己を

知る明^{めい}があつたといつていい。私なども、一生懸命に骨を折って、そして、貧弱無味な作品を作り上げて、自己の無能を歎息することが多いので、二葉亭の作品を読みながら、身につまされるのである。私は明治二十年代の作家のうちでは最も二葉亭に敬意を寄せている。最も親しみを覚えている。しかし、『其面影』や『平凡』は、作それ自身は、決して傑出した芸術ではないと、私はいたましく確信している。それが当時文壇の人々からも期待され、相当に重んぜられたのは、二葉亭の人格の力と、翻訳者としての手腕と、及び、文壇の戦闘範囲外

に超然として敵を有^もつていなかっただためであつた。夏目漱石が、虚子の『俳諧師』を批評して、『平凡』よりいいと遠慮しながら一言いったのに、私は同感である。

三

『平凡』では、雪江さんのところも、お糸さんのところも、筆つきが鈍昧である。むしろいやみである。年少の頃書いた『浮雲』のお勢ほどの生氣もない。しかし、『平凡』には、作者の感想が洩らされているので、その

点が面白い。

「私が感化を受けた友というのは……文学が専門だから、文学書は私より余計読んでいたというだけで、何でもない事だが、それを私は大層えらいように思っていた。まだファウストを読まぬ時、ファウストの話を聴かされる。なに、友は愚にも附かん事を言っているのだが、その愚にもつかん事を、人生だ、知識だ、煩悶だ、肉だ、墮落だ、解脱だというような意味のあり気な言葉で勿体をつけて話されると、何だか有難くなつて来て、これを語る友はえらいと思つた。こんな馬鹿気た話はない。

……読んで分ったところで、ファウストがどれほどの物だ？ 技巧の妙を除いたら、果してどれほどの価値がある？」

「文学の実際は、人間の墮落だ。墮落を潤色して、懦弱だじやくな人間を更に懦弱にするばかりだ。……」

「私は、自然だ人生だと口にはいつていたけれど、ただ書物でそんな言葉を覚えただけで、意味がよく分っているのではなかった。……小説、殊に輸入小説には、人生の真相が活字の面に浮いているように思っていた。西洋の詩人は皆東洋の詩人に勝るように思っていた。作の

新旧を論じてその価値を定めていた。自分はこんな下らん真似をしていながら、他の額に汗して着実の浮世を渡る人達がたまたま文壇の事情に通ぜぬと、直ぐ俗物と罵り、俗衆と罵って、独り自から高しとされていた。独り自から高しとする一方で、想像で姦淫して、一人で墮落していた。」

作中の人物にいわせているこういう感想を、直ちに作者自身の述懐と見做す訳には行かないかも知れないが、おりおり噂に聞き、また雑誌などで読んだ彼れの生前の文学観を思い出すと、『平凡』の主人公の所感は二葉亭

の心境を幾分言い現しているのであるろうと思われる。

彼れは、一面文学を蔑視していた。……私は、よつぽど前に、坪内博士を訪問した時「世の中の出来事にそう珍しいことはないようですから、文学に扱う材料も大抵似たり寄ったりで、詰まりは文学の価値は技巧だけじゃないでしようか」というと、博士は、「二葉亭がそういつていた。文学は技巧だけのものだといっていた」といわれた。……

「フアウストだって、技巧の妙を除いたら何が残る？ 愚にもつかん事を、人生だ、煩悶だ、と勿体つけ

て見ても、馬鹿な話だ」と『平凡』のなかでもいっているが、そのくせ、彼れは、「人生とは何ぞや」ということを、頻りに考えていたらしい。これは、ロシヤ文学の感化でもあるだろうが、空漠たる懷疑は絶えず彼れの心に宿っていた。「人生」とか、「死生」とか、そういうことを「真正直」に考えていた。今日の目で見ると、何でそんな取り留めのないことに心を痛めていたかと陳腐に感ぜられるだろうが、そこに、明治二十年代の悩みが見られて、二葉亭の存在に興味が感ぜられる。彼れはその小説の主人公の如く、少し愚図で頭が冴えていなかったら

しいが、正直であつた。今日のある種の青年のように狡猾なところ、軽薄なところは少しもなかつた。あの三つの小説は、芸術として幼稚ではあるが、人間の正直さは現れている。

内田魯庵氏の『思ひ出す人々』のうち、「二葉亭四迷の一生」と題して、彼れに関する追憶と批評とが、面白く記されているが、これは二葉亭の人となりを知るためには、必ず読むべきものである。創作といつては、たった三つしか書き遺さなかつた二葉亭が、明治文学史上に重きを置かれた所以が、内田氏の所説を読むと理解さ

れる。「こんなまずい物を書いて原稿料を取っては相済まん」という自責の念、自己の才能に対する過分の否定は、周囲の甘い賞讃によってもぐらつく時がなかった。これは、他に例のないことで、私などは、自己の創作については、常に不足を感じ続けて来たのに関らず、世間に推賞されると、うかといいい気になるのである。夏目漱石でも、世間のおだてに乗せられて、自分も一ぱしえらいものになった気でいたらしい。芸術家で名誉の快感を覚えないのは、芸術家としての特権を失う訳であるが、ただ二葉亭にだけはそれがなかった。その点では不思議

な人であり、また不幸な人であつた。自作の世に認められないのを憤つて、たまたに悪評を下されると、親の敵のように深く記憶に留める文学者気質は、二葉亭の気持とは正反対である。

四

鷗外が新日本の文壇の先覚者として重んぜられたのは、近代の西欧文学に早く接触したのに由る。二葉亭が早くから異色を呈したのも、偶然、近代のロシヤ文学に

刺戟されたためであつた。陳腐な儒教によつて少年期の精神を鍛練された彼れは、青年時代にロシヤ文学の感化を受けてああいう人間になつたのであつた。儒教気質と、詩趣を帯びた夢想癖との、矛盾した傾向の混和が、二葉亭という人間をつくり上げた。昔の支那文学で培われた国士とは違つていた。ガツシリした体軀の持主で、天下国家を志していたあの二葉亭が、「氣の鬱したる時は、外出せば少しは紛るゝ事もあるべしと思へど、わざと引籠りて求めて煩悶するが却つて心地よきやうに思ふ」と、自らいつていたように、空漠たる人生問題なんかに思い

悩んでいた有様を想像すると、いかにも不調和に思われる。粉屋のチホンが、訳の分らぬ「ふさぎの虫」に取り付かれて煩悶するのが、傍目には滑稽に思われるのと似寄っていないこともない。国木田独歩も空漠たる人生問題に苦しんだ。北村透谷もそうであった。綱島梁川もそうであった。

しかし、今日は時代が変わった。一般の青年の心意気は違つて来た。

私は、たった一度、人に連れられて二葉亭を訪問したことがあったが、その時、彼れが、年にも似合ず、「藤

村操の投身」事件を話題として、同情のある感想を述べ
ていたのを、今も覚えている。

日本文学電子図書館

作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店
2002年6月14日 第1刷

日本文学電子図書館